

マインツでお会いした岡先生

金山万里子

岡道男先生が、同志社大学から京都大学に助教授としてご赴任になったのが1969年4月のことですから、ちょうど私が道草を食った挙句にD.C.に進学した年に当たります。進学直後ののんびり気分で、私は始まったばかりの先生のホメロス演習をのぞいて見ました。ところが、この演習たるや、それまで私が接していた哲学科の、毎回少ない範囲を厳密に読み、解釈するという読み方とまったく異なり、ひたすらテキストを先へ先へと読み進んでとどまるところを知らないというもので、ホメロスの語彙にも文法にもいたって暗かった私は、わずか2、3度にしてあえなく脱落してしまいました。そして、それだけで終ったならば、先生と私は一瞬すれ違ったというだけの関係で、私は先生に対して、一種の後ろめたさと申し訳なさを感じ続けるにとどまったことでしょう。その当時は、大学紛争の騒然とした雰囲気文学部周辺をなお色濃く覆っていて、その殺伐とした環境から離れたい思いを抱いていた私に、松平千秋先生は、マインツ大学の W. Marg 先生の許への留学を勧めてくださいました。そして両先生のご尽力で、ラインラント・プファルツ州政府奨学金を私がいただけるように計らってくださいだったので、1971年3月から結局3年間、同大学の古典文献学科に在籍することになりました。こうして京大を離れたことが、岡先生の、ご自身にはどこまでも厳しく、他者には温かいあの高潔なお人柄の一端に触れ得る機会になったのですから、人の出会いの不思議さを思わせられます。

その頃、マインツ大学の古典文献学科を訪れた人間は、否応なしに京都の個性ある3人の先生方——松平千秋先生、松本仁助先生、岡道男先生——の噂話を、Marg 先生ご自身から秘書の Frau Fischer にいたるまでの誰彼から聞かされない訳には行きませんでした。この経験は、私の滞独第一日目から始まりました。機内状況が悪くて一睡もできなかった最悪の心身状態で、私がフランクフルト空港に降り立ちますと——当時この空港は、まだ小さくて薄汚い印象の旧空港で、マインツとの間もバスの便しかありませんでした——、まったく思いもかけないことでしたが、A. Spira 先生がお迎えに来てくださっていて（松本先生か岡先生から一応連絡だけは届いていたのです。出迎えは別の日本

人の方に頼んでおいてくださったのですが、後で聞いたところによると、その方は「面倒」だったので、わざわざ不便な空港まで来てはくさいませんでした！ ちなみに、日本を発つ前にたしか松本先生から、フランクフルト空港はとても危険な場所だから、見知らぬ男性が声をかけてきても決して相手になってはいけない、という忠告をいただいていたために、Spira 先生がしきりに話しかけてこられるのを必死で振り切ろうとした、というような、後で皆さんから大笑いされた一幕もありました）、そのままバスでマインツの W. Nicolai 先生のお宅に連れて行かれ、Nicolai 先生ご一家と Spira 先生ご夫妻の歓待——京都の3先生をめぐる楽しいお話が飛び交う（但し、十分に理解できた訳ではありません）——を受け、その夜は Nicolai 先生のお宅に泊めていただきました。Spira 先生が abholen、Nicolai 先生が beherbergen、と分担して、遠い日本からの女子学生が、右も左も分からぬ外国でいきなり困難に陥らないように手配をしてくださっていたのでした。ドイツ人の徹底して具体的な Gastfreundlichkeit に初めて接した忘れがたい一日でした。

この日以来、私はしばしば3先生のマインツでのご生活の様子などを耳にすることになりましたが、それまでの2度にわたるマインツご滞在が長かったせいか、岡先生に関する情報がいちばん多く、先生の猛烈な勉強ぶり、誠実で几帳面で繊細なご性格にまつわるエピソードなどから、私は深い敬慕に値する岡先生像を抱くようになりました。それに加えて、岡先生ご自身も折に触れ、不自由な外国での勉学に苦勞している私への励ましのお便りを送ってくださり、この細い文通の糸を通して、先生との交わりは深まり、多くのご教示を受ける幸いを得ることになったのです。

先生との文通の間に何度か、文献のコピーを送ってほしいというご依頼がありました。そんな形で先生のお手伝いができることが私には嬉しくてならなかったのですが、ただ、その度に、「忙しいあなたの時間を使わせてしまって申し訳ない、迷惑をかけて済まない」という丁重きわまるお礼状（お詫び状？）が届くのには、いささか困惑しました。その上、「これはいったい何回分のおつもりかしら？」と訝るほどの「送料」を同封してくださるのです。当時の私は本当に若気の至りで、先生に向かっても生意気に、「時間がなくて出来ないときには出来ませんと申し上げますから、そんな風にあまりご遠慮にならないで、ただこれこれを送れ、とだけおっしゃってください。でないと、かえって私の方が心苦しく感じてしまいます。それに、切手代くらいのことは何でもあ

りませんから、ご心配はご不用になさってください」などと、意見がましい手紙を差し上げたことがあります。すると、私の無礼な手紙に対して、「本当にあなたの言う通りで、余計な心の負担をかけてしまった。自分が悪かった」と、またもや丁寧なお詫びのお手紙をくださるのでした。

いまにして、私の目には、先生の本当の厳しさも優しさも見えず、ただ先生の大きな包容力とご忍耐に包まれ、それに甘え切っていた、当時の自分の姿が浮かび上がってきます。私が頂いていた奨学金はそれほど多額のものではなく、とくに2年目は僅かでしたし——それでも、2年目の継続のためにMarg先生はかなりご苦勞をなさったようで、ようやく継続許可が下りると、お礼にぜひとも一度招待しろとの厳命で、寮の自室にお招きしてスキヤキで上機嫌の一夜をお過ごしいただいたことを懐かしく思い起こします——、3年目は完全に自費となり、通訳やガイドの仕事で学費の不足を補っていました。岡先生は、そんな私の状況をおおよそ承知でしたから、「送料」という名目で、少しでも私を援助してやりたいとお考えになっていたのでしょう。いつも相手の気づかないところで、細やかな配慮をしてくださり、非力で怠惰な者にも寛容と励ましに満ちた温かい眼差しを注ぎ続けてくださった——そして、いまでも注ぎ続けていてくださる——先生のお心の広さ、愛の大きさを想わずにはられません。先生からお送りいただいた大量の「国際返信切手券」の一部は、現在も私の手許に大切に残してあります。